

# 『雨音の涙』

井門よう香

5,056 文字

あらすじ

娘の加奈の結婚が二か月後に迫り、寂しさに溜息をついてしまう私。ある雨の日、勤務先の老人ホームに入居している高見さんが、嫁入り道具の座敷箒で掃除をし、何度も救われたと話してくれた。その話を聞き、私は何か大事なものを忘れていた気がて、加奈と二人で大掃除をすることにする。

「夕方にはまた雨脚が強くなるでしょう」

朝のラジオのお天気コーナーに耳をそばだてていると、お天気お姉さんがそう伝えた。これで、今日も雨が確定となり、五日連続で雨降りということになる。自転車通勤の私は雨合羽も確定。こうなると、化粧も洋服選びもあっさり手を抜く。清潔感があればいい。四〇代半ばとなり、そんな部分の価値観も変わってきている。

「行ってくるねー」玄関でスニーカーを履きながら、二階で出勤の支度中の娘の加奈に向けて声をかけた。社会人三年目の二十五歳ともなれば、身だしなみの優先順位は高い。朝から三十分は部屋にこもっている。

玄関ドアを出るとき、「気をつけてねー」と加奈の声が背中に届いた。

ごわごわと雨合羽に着られながら自転車にまたがる。今日のシフトは日勤帯。老人ホームの勤務は日々体力が物を言う。「よしっ」と気合をいれ、ペダルをこぎ始めた。

午後のレクリエーションが始まるまでのひととき、昼食の満腹感も手伝ってか、フロア内には静けさが漂う。

その静けさの中で目立たぬよう、踵を丁寧に着地させ、なるべく足音がたたないようにして歩いた。もっとも、この時間帯にもこなさなければならない雑務や掃除は幾つもあるので、歩く速度は意外と早い。

雑巾を手に持ち、窓ガラスの拭き掃除に取り掛かる。窓の向こうは、見慣れた住宅街。どこもかしこも雨に濡れきっている。遠くの空には、朝よりもさらに薄黒さを増した雲が、みるみる低く垂れこみはじめている。当たったね。天気予報のお姉さんにとりあえず伝えた。

それにしても、よく降る雨だ。十月に入ってから薄日は差すものの、まだ太陽そのものは見れていない。

窓ガラスに打ち付ける雨粒の、そのかすかな雨音に混ざって、今朝の加奈の声が頭の中でまた聞こえた。

あと二か月。あと二か月後にはそんな加奈の声が聞こえなくなる日が、確実にやってくる。どれほど静かで寂しい家になるのか。そうなったら、自分はどうなってしまうのか。今でさえ家で顔を合わせると、なんとなくよそよそしくなってしまう、加奈には申し訳なく思うほどなのに。

「はあー」と思わず小さな溜息をつく。

娘を嫁がせる母親として、ポンコツすぎる自分が情けない。

「秋の長雨って、うっとうしいわね」

不意に声をかけられ、はっと我に返った。窓ガラスを掃除していた手を止め、声の方に振り向く。入居者の高見順子さんが華奢な右手で杖を突きながら、ゆっくりとこちらに向かって歩いてくる。

「毎日、よく降りますね」

自分の声がひっくり返ったのと、今さっき溜息なんかをついていた姿を見られたかと思うと恥ずかしくなり、肩をすくめた。そして、そのすべてを中途半端な笑顔でごまかしながら少し左にずれて、二人で雨に濡れた窓ガラスに向き合う恰好になった。

「ホームで暮らしてるからね、長雨だろうと濡れやしないんだけどね。職員さんたちは通いだものね。大変でしょ」

窓ガラスの向こうをのぞき見るように高見さんが言う。近づきすぎて、コツとおでこがなった。私も真似をして顔を窓ガラスに目一杯近づけてみる。自分の息で曇ってしまったので、雑巾でさっと窓をぬぐった。

「いえ、濡れなくなってお日様が出ないってだけでうっとうしいですよ。薄暗くて、肌寒いですし。気持ちだってパツとしませんよね」

「本当ね」

高見さんが言った。そして、雑巾を持つ私の右手の上に、高見さんの左手がポンと乗せられた。

高見さんの手は柔らかな皺と、使い込まれた艶があって、少し冷たい。

「なんだか最近いろいろと懐かしくてね。昔のこと思い出すのよ。今はね、あなたの姿みて、子供たちのことを思ってお掃除をしていたときのことを思い出しちゃったわ」

高見順子さんは一年ほど前にこの老人ホームに入居された。御年八十四歳。私たち職員にも気配りをして下さり、奥ゆかしく、それでいて、ユーモアがある。こんな可愛いおばあちゃんになれたらいいなと思える、理想の女性だ。

その高見さんの手がポンポンと上下する。

「ずいぶんと救われたのよ。お掃除には」

高見さんは私の手の上に置いた左手をどかし、体を反転させて、窓下に沿って設置してある手すりに背中を寄りかからせて話し始めた。

「些細なことでもすぐに心配になっちゃう性分だね。例えば子供たちが学校に行っている間に大雨なんて降っちゃうと、もう気が気でなくて。迎えに行こうって、一度は玄関出るんだけど、ふと考えて、入れ違いになったら子供たちは鍵を持ってないから家に入れなくて、思い直して家に戻るの。それでね、気を紛らわせるためにお掃除を始めちゃうわけ。雨で戸は開けられないから、湿気った畳を乾拭きしたりね。一心不乱っていうのかしら、畳の目に沿って右に左にと力いっぱい拭いて。そうするとあっという間に時間がたって、そのうち一人二人と「ただいまー」って、元気よく帰ってくるの」

高見さんは茶目っ気たっぷりの笑顔で「笑っちゃうでしょ」と言って、優しい口調で続ける。

「帰ってきた時の子供たちの顔が、なんだか自信に満ちててね。朝出るときの顔と違って見えるの。その姿が不憫で愛おしくてね。もう頭のとっぺんから足先までずぶ濡れだし、心細かったんじゃないかなって思って、手ぬぐいでごしごし拭いてやるの。そうすると子供が『お母さん何で泣いてるの？』って、不思議そうに私の顔をのぞいて言うのよ。子供たちにしてみれば、日常の中のただの雨の日に過ぎないのよね」

「子供ってたくましいですね」小学生だった頃の加奈を思い出す。

「まさに親の心子知らず、ってこのことかしらね。後になってみれば、ああいう瞬間が人生の節目なんじゃないかって思えるのね。卒業とか成人とか結婚とかね、そういう大きな節目ももちろんやってくるけど、日常の、ほんの些細な出来事が意外と大切だって、こんな年寄りになってから気づかされるのよ。もう、とっくに子育てなんて終わってるのに」

柔らかな皺に囲まれたつぶらな目が、じっと前を見据えている。

「朝、仕事や学校に行く主人と子供たちの背中を見送って、私は家のお掃除をはじめて。はたきをかけて、箒で掃き出して、雑巾がけをして。お掃除ってもちろんきれいにするっていうのが目当てだけどね、私は、家族が無事に元気に『ただいま』って帰ってきますようにって、祈りながらいつもお掃除をしていた気がするわね。家を守るってそういうことかなって。あっそうそう、その箒っていうのが、母が持たせてくれた嫁入り道具だったのよ。座敷箒ね」

「ざしきぼうきですか？」

「そうなの。『これできちんと掃除をしなさい』て結婚当初はただお掃除のためって思ってたけど。心配事やなんかがあると、座敷を掃きながらね、母のことを思い出して、母だったらどうしてたろうか？ とか、考えるのね。結局答えなんかは自分で出すことになるんだけど、勇気づけられたわね、何度も。その筈に」母の思い。胸があつくなってくる。

「子供たちが大きくなってくるとして、一人二人と家を出ていくじゃない。家庭を持ったり、仕事のためだったり。自立するんだから、嬉しいことなのに『ただいま』って帰ってこないかと思うとね。お掃除しながら、涙が止まらなくなっちゃうのよ。五人の子供に恵まれたけど、末の娘が嫁いでいったときは、堪えたわね。一時、何をする気力もなくなって。もちろんお掃除も。そうしたらね、みるみる家が荒んでいくっていうのかしら、意気消沈していくのを感じてね」

高見さんは、また窓ガラスの方に向き直った。

「まるで家族と過ごした日々までもが消えていってしまうような気がしたの。だから、泣いてる場合じゃない、家を守らなきゃって思ってね。そして今度は、子供たちが遊びに来たとき『いらっしやい』って迎えるのを楽しみにして、帰っていくと無事を祈って、また一生懸命お掃除をして、家を守って。だからね、母が持たせてくれたのは筈だけど、嫁入り道具はお掃除をする心だったんじゃないかって、そう解釈することにしたのよ」

胸のあつさはピークを越え、涙があふれた。

「あら、泣かしちゃったかしら」いたずらっ子のような笑顔に、年齢を重ねる素晴らしさに、畏敬の念を抱いた。

十一月に入って最初の土曜日、朝四時起きでおむすびと卵焼き、そして加奈の大好きなわかめと油揚げのお味噌汁を作っていた。おむすびの具はたらことほぐした焼き鮭、卵焼きは甘め。これも加奈のお気に入りだ。

すべて出来上がり、台所の後片付けも終わろうとしたとき、加奈が起きてきた。

「おはようー」

んんーっと寝ぼけた声をあげながら、両腕を上にあげて伸びをする加奈。肩の長さのボブヘアも寝癖でボサボサのまままだ。あまりに無防備な姿に吹き出しそうになる。

「おはよう。まだ早いから寝てていいわよ」

「うーん。大丈夫。これで二度寝しちゃったら、永遠に起きられそうにないから。うわ、おいしそう」

加奈の手が食卓テーブルに並んだ卵焼きに伸びる。

「起きちゃうんだったら、先に顔洗ってね」

伸びた手を無言で引き戻し、加奈はしょぼくれて踵を返し洗面所に向かう。その背中が途轍もなく愛おしく感じた。

無防備さはそのまま戻った加奈と、向かい合って席についた。

「あーおいしい。幸せすぎる」

東側の窓から入るまぶしい朝日に目を細めながら、卵焼きをほおべる加奈。

「朝からいい天気ね。絶好の大掃除日和だわ。明日も予定してるけど、なるべく今日中に片付けちゃうからね。そのつもりで」

「うわー。お母さんやる気満々で、ちょっと怖いんですけど」三つ目のおむすびを食べ終え「やばい、美味しすぎて止まらない」とまたおむすびに加奈の手が伸びていった。

一階に四人掛けの食卓テーブルが、かろうじておける台所と六畳の和室が一つ、それと浴室などの水まわりがある。二階には六畳の和室と洋室が一室ずつある。

二人で住むには十分すぎるこの家は、加奈が生まれてすぐ事故で亡くなってしまった夫が遺してくれたもの。

お互い二十二歳で結婚し、すぐに加奈を身ごもった。半年後には新しい家族が増える嬉しさと不安の中、夫はこの家を購入した。半ば強引に。何をそんなに急いでいるのか、夫の考えを理解できないでいた。

しかし、加奈を出産して間もなく、その日は唐突にやってきてしまった。

出勤途中に交通事故に巻き込まれ、あっけなく帰らぬ人となったのだ。

夫のいない新居はあまりに残酷で、いっそ火を放って加奈と二人で死んでしまいたい、と何度も考えた。夫の身勝手さを責め、自分自身の弱さを責める日々がどれくらい続いただろう。

あれから二十五年。がむしゃらに生きてきた。

「なんかさ」四つ目のおむすびを食べ終えた加奈が、台所をぐるりと見渡し、天井のライトを見上げて言う。「もうキレイじゃない？家の中」

「ようやく気付いたか。今日の予定が決まってから、出来るところは少しずつ掃除してきたからね」

高見さんの話を聞いてから、自分が何か大事なものを、拾い忘れていた気がして、居ても立っても居られず、合間をみつけては、一人で掃除をしていた。そして、ポンコツな自分から抜け出したい、強くなりたい。そんなことも期待しながら毎回始めるのだけど、思い出される出来事に涙があふれるばかりで、参ってしまった。

「もしかして、掃除が残ってるのってあたしの部屋だけだったりして」

「その通りよ。この家の中で加奈の部屋が一番手ごわいんだから。さっ始めるわよ」

「お母さん」顔を赤らめて加奈が言う。「ありがとう」

「加奈」

「お母さん、本当にありがとうございました。あたし、お母さんにいろいろと、数えきれないくらい教わって、迷惑もたくさんかけて、なのに、なんにもしてあげられてなくて」

「何言ってるのよ、お母さんのほうこそ加奈にたくさん助けてもらってきたんだから」鼻の奥がツンとする。「だから、頑張っただけなの、こちらこそありがとう、加奈」

加奈の足元に涙が落ちる。加奈の両手をとって、私の手で包んだ。皺の無いつるりとした手。

「母さんは大丈夫だから」

本当に大丈夫かもしれない。今加奈を目の前にして、そう思える。

加奈を出産したときの夫の笑顔が浮かぶ。大喜びでくしゃくしゃになった笑顔を。そうだ、夫の思いと一緒にこの家を守っていこう。はたきをかけて、箒で掃き出して、雑巾がけをして。そして、加奈たち新しい家族の無事を祈っていこう。

「だから、加奈、幸せになって」

あの雨の日、高見さんが最後に言っていた。

「お掃除ができる家があるって、素敵なことだよね」

加奈の嫁入り道具を考えなくては。